DOJIN
R18
成人向け
※18歳未満の
購入・閲覧禁止
- 碧 猫 総 集 編 -
白迷の手帖

収録作品

『マヨヒガスケジュールAM』

『マヨヒガスケジュールPM』

『ハクマヨスケジュールAM』

『ハクマヨスケジュールPM』

『それからのおはなし。』

スヨヒガ
ジュール
AM
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

某日——

AM 6:30

いつも通りの
時間——

いつも通りに
朝日の眩しさを受け

いつも通りの
下半身の温もりと
軽い圧迫感で目を覚ます

のし…

もぞもぞと動く
盛り上がった布団を
めくると

ちゅ♥
ちゅぱ♥
ちゅる…♥
いつの間にか潜り込んで
愚息を咥えている
橙と目が合う

おはよう
ございます♪
……
おはよう

ぺの…♥
挨拶を交わすと
橙は奉仕を再開し
朝勃ちで
そそり勃った愚息を
小さめの口と舌で
丹念に舐め回す
チュパ♥
チュパ♥

深く咥えられる度
歯がつんつんと
当たって心地よい

プアッ

橙の頭を
軽く押さえると
待ち遠しそうに
視線を向けてくれるので

ビュルルル

射精の瞬間
喉奥まで押し込み
精液を食道へと流し込む

流石に
苦しかったのか
跳ねるようにして
愚息が吐き出される

口から
精液をこぼしながら
咳き込む橙をよそに

吐き出された精液が
可愛い顔を
容赦なく汚していく

ひとまず外の井戸で
顔を洗ったり
水を汲みに行く

ガシャ
ガシャ
ガシャ
ガシャ

チチチ…

AM 6:47

——が

チラ…

だいぶ
橙の機嫌を損ねて
しまったようで

ツーン

ツーンとした顔で居座り
無言の抗議を行ってくる

最後には
背中に
よじ登られ

ヨジ
ヨジ
ヨジ

作業が
できないので
素直に
謝ることにした

謝罪代わりの
キスをせがまれたので
優しく額に落としてやる

チュッ

おはよう
ございまーす

AM 6:54

ん……
おはよう

もうすぐ
朝餉ができるからな

橙は紫様を
起こしてきてくれ

はーい

タタッ…
藍様、何か手伝うことは……
んー そうだな……
しゅる…
それよりも……
スン…
朝から橙が粗相をしたようだな？
スッ…
ズズッ…

ムニュ

ほら――

拭いてあげるから
じっとして

押し付けられた
柔らかさが
胸から腹へと移動し

服の下から
自己主張し始めた
愚息を補足する

ムニュ

ぱぁ
ボロッ
慣れた手付きで
愚息を露出させられ
胸の谷間に包み込まれる
柔らかく暖かい快感に
情けない声が
出そうになるが
我慢してこう一言

うあ…
……なんで胸の部分に穴が？
ガク ガク
ん？そんなの決まっているだろう
お前は服を着たままする方が興奮するんだろう？
ほら……いっぱい出していいぞ……

我慢も虚しく
優しく包み込まれながら
藍の胸の中に射精する。

脈打つ度に
形を変える柔らかさが
愚息を通して感じられ

まるで
蕩けていくような快感が
下半身から脳まで
駆け足で伝達していく

あーあー
こんなに
射精して……

おっぱい
ドロドロじゃないか……

それだけ言うと
精液を拭いもせずに
藍は服を整える

じわぁ…♥

キュッ♥

ふふ……

胸の中
凄いことに
なってるぞ……？

……
温かいなぁ

ぐちゅる♥

じわぁ…

ぐちゅる♥

ぐちゅ♥

ズチュッ♥

ぽ…

若干
気恥ずかしいような
申し訳ないような

そんな
困ってる様子を
ニヤニヤと
笑われてしまった

その後起きてきた
紫様を含め
みんなで朝食

AM 7:23

モグ

モグ

気怠さと戦いつつ
無理矢理気味に
胃に食事を運ぶ

AM 7:55

紫様にねだられ
綺麗な身体に見惚れつつ
着付けを手伝う

決して
良い手際とは
言えないが――

それなりに
満足して
もらえたようだ

ニヘ

お礼にしては
妙に長く、情熱的で

ありがとう、と
お礼にキスを貰う

――が

チュッ♥

頬に
添えられた指が
首を辿り――

鎖骨をつつ、と
撫でていく

一張羅に
皺がつきますよ、と
制止するが――

あら――

私はあなたになら
汚されても
構わないのだけれどね

AM 8:04

気付いたら
その場で紫を
組み伏していた

きちんと整えたはずの
衣服なんか
お構いなしに

強く抱擁し、
胸を揉みしだき、
口内を貪る

露わになった
綺麗な内腿を
撫でまわすと

拒むよう
きゅっと足が
閉じられる

可愛らしい反応を
楽しみながら
白い肌に
手を滑らせていく

顔が蕩けてきたのを
見計らい足を開かせ

あてがった愚息を
一気に最奥まで
挿入する

まだ日が昇りかけなのにも関わらず――

お互い我慢できずに求め合う

チュンッ

腰を打ち付ける度に水音が響き

可愛い嬌声が紫の口から漏れる

んっ♥
絶頂寸前で
紫の膣内から
愚息を引き抜き
思うがままに
白濁液を
ぶち撒ける
タパ…♥
ただただ
言葉通りに
紫を
汚すためだけに
至る所へ
精液がかかっていく

ドクッ♥
ビュルッ♥
ビュクッ♥
ドクンッ♥
ビュルルルッ♥
ドプッ♥

紫は呆れながらも

恍惚とも母性ともとれる微笑みを浮かべながら欲望を受け止めてくれた

AM 8:55

我に返り紫様に謝罪しながら後始末をしていく

しかし紫様は『いいわよこのままで』と——

軽く乾拭きしただけでそれ以上のことを拒んできた

少し戸惑ったが
頬を赤らめ
口に手を当てる

そんな紫様を
見てしまったら
それ以上言及は
できなかった

AM 9:16

紫様の外出を
見送った後
藍様の手伝いへ

手伝いの途中でも
紫様が
自分の精液まみれで
出かけていると思うと

なんだか変に
意識してしまい

？？？

藍様に怪訝な顔で
見られた

裏の畑に向かう途中感づかれたのか廊下で藍様に誘われる

サワ…

サワ…

ナデ

ナデ

AM 9:54

正直そろそろきついが断るのも悪いし

紫様の事でムラムラしてたのは確かなのでお言葉に甘えることに

ビクッ

ハッ

ピッ

キュン

後ろから抱きとめ大きな乳房と細い腰を服の上から堪能する

モニ

モニ

ハァッ♥
ハッ♥
カク
カク
藍も昂ぶってきたのを確認し壁に手をつけさせ片足を持ち上げ挿入する
ズププ…♥
藍の膣内は蕩けるように熱くうねるように愚息を飲み込んでいく
ガク♥
キュ
プル
あっ♥
ビュ…♥
やっ♥

藍の柔らかさを
全身で堪能しながら
息を吐く暇も与えず
腰を打ち付け

パンッ

ハンッ

パンッ

パンッ

ハニュ

胸いっぱいに
藍の香りを味わいながら
最奥に精液を流し込む

ビュク

キュッ

ビュルルッ

ドクンッ

ドクッ

切ない声を上げ
藍も身体を
ビクンと跳ねさせた

じゅる…
パンッ
パンッ
もう何回出しただろうか
AM 10:48
気づいたら橙もいつの間にか参加してきており
あっ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ギュッ
きゅん
小柄な身体を浮かせ壁に押し付けられた状態で嬌声を上げていた

少し激しく
扱ってやると
これ以上ないくらい
幸せそうな声を出し

そのまま
橙の小さな膣内も
白い欲望で
塗りたくられていく

壁を伝いペタリと
座り込んだ橙の口に
愚息を押し付け掃除させる

何も抵抗なく
舌を這わせてくれる
橙の表情は
最後まで恍惚な表情を
浮かべていた

色々あったが
畑作業も
定刻通りに一段落し

縁側に腰掛け
休憩がてらうとうと
していると――

AM 11:57

ただいまー♪

スキマから
現れた紫様に
抱きしめられる

当人曰く
補給で一旦
戻ってきたとか
なんとか

先程までの
行為の疲れで
変な気は起きず、

……あら？
どうしたの？

……いえ

ただただ優しく
抱きしめられて
いると――

――ごめんなさい
スッ…
疲れを察してくれたのか――
それじゃあまた夜に――
ね♡
スゥ…
察してくれたらしいが特に配慮はしてくれないようだ
PM 0:00
廊下の方から昼餉を知らせる声がする
午後は藍様と人里へ行く予定だ――
続

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
ヌヨジュガル PM

午後も実に陽気な昼下がりであった

空は些か雲が多めに見えるが崩れるような気配はなく

穏やかに過ごしやすい気温を保っている

PM 13:34

チュパ♥
チュプ♥
チュプ♥
チュパ♥
チュプ♥
ズチュ♥
チュ♥

そんな蒼昊の下私は人里に向かうその傍らで――

本日通算で二桁目の絶頂を迎えようとしていた

茂みに連れ込まれ
流れるように
戯れた後

暖かい口の中へ
精を吐き出す

愛おしそうに
ゆっくり、ゆっくりと
自らの喉に白い汚れを
受け入れていく

欲望に汚された
赤い口内をちらちらと
見せつけながら

すぐに回復の兆しを
見せてきた
愚息を撫でられる

ふふ……
溺れるかと
思ったぞ？

まだまだ
元気だなぁ？

……正直
午前中だけで
倒れそうだったのに

お昼ご飯辺りから
急に元気になった気が
するんですが
何か心当たりは？

んー？

そりゃ
一服盛ったからな

そんな
悪びれもなく

だからいつも
言っているだろう

お前も一服
盛り返しても
いいんだぞー？

睡眠薬だって
渡してるんだし

……

そういう
ことではない、と
無言の抗議を行うように

藍の膨よかな胸に
手を伸ばし
上から遠慮なく
揉みしだく

人里に
辿り着くまでの道中
しばし柔らかさと
小さな嬌声を
楽しませてもらった

人里に着くと
袖を揺らしながら伸びる
白い腕がこちらの
腕へと絡みつき

キュッ

ムニュ

伴侶を誇示するかの如く
見せつけるように身体を
密着させてくる

PM 14:01

この程度の
スキンシップには
慣れたもので

周囲の目は
もうさほど
気にならなくなった

大妖怪に対する
畏怖の視線

外来人（よそもの）に対する
嫌悪の視線

睦まじさに対する
嫉妬の視線

妖怪と人間の
組み合わせに対する
憐情の視線

……

様々な
ドロドロとした
いくつもの
目が纏わりつくが――

そんなことは彼女らを
愛し、生き、死ぬ事に
覚悟を決めたその日から

些細な事でしかない

だが彼女は
そんな心中など
気にも留めず

意地の悪いことに
買い物中

藍は時折
ちらりとこちらへ
口内を見せつけてくる

口内には
先程の精液が
まだ残っており

里を練り歩く時も
店主とやりとり
している時も

藍はずっと
残した精液の味を
楽しみつつ

日常の最中でも
性行為の残滓を
口の中で胎動させ
舌の上で転がしているのだ

絶え間なく
藍を汚しているという
背徳感と征服感を
じわりじわりと刺激され

思わず前かがみに
なりそうになるのを
いつもの柔和な笑顔で
見つめられていた

日用品や食料などの
買い物を済ませ
家路へとつく途中

PM 14:55

連裏藍様に引っ張られ
裏路地へと
連れられていく

あまり目を
合わせたくない
風貌の者が
多くなっていくが

彼らからしたら
大妖怪こそ
目を合わせたくない
存在だろう

彼らも
ただの人間で

そそくさと
隠れるように
道を開けてくれた

向かう先は
長屋の一室で

小さな建物だが
暖簾がかかっている事から
何かの商店だろう

PM 14:58

店の中は
女性の好みそうな香が
下品なほど焚かれており

店主と思わしき人物が
店の奥で鎮座している

店内には春画を始めとした
書物や鞭、ロウソク
男性器を模した張型などが
大量に陳列されていた

邪魔するよ

どうやらここは
夜のお供に
使用する物を
取り扱ってるようで

雰囲気の違いはあれど
いわゆる
『大人のお店』
というやつだろうか

店主と思わしき人物と
商談を始める彼女に

「私に盛った薬も
ここで？」

と少し
嫌味ったらしく
聞くと

逆だよ
私がここに
卸してるのさ

なんと

そんな
誰が作ったかも分からない
得体の知れないモノを

大切な伴侶に
飲ますわけには
いかないだろう？

副作用でも
あったらどうする？

盛るのにも躊躇して
欲しかったなぁ

商談が終わるまで
ぼーっと店内を
眺めていると

カラカラ

PM 15:19

キョロ

キョロ

しきりに
辺りを気にしながら
こっそりと

なにやら
見知った顔が
入店してきたのである

そわ

そわ

多分道中誰にも
見つからなかった事を
安堵しているところ
大変心苦しいのだが

おやおや
これはこれは
妖夢殿ではないか

ヒィッ!?

巡り合わせの
悪さには
心中お察しする

これは
意外だなぁ

このような場所に
妖夢殿が来るとは

ガバ

いや、あの……

……言いつけか？
大変なものだなぁ

え!?
えっと……

意地の悪い
質問だなぁ

どのように答えても
誰かを淫猥だと
貶めることになる

その……

主人か自分か
はたまた赤の他人かの
違いはあれど

生真面目な妖夢に
答えることは
できるまい

モバ

助け舟を求めるよう
こちらを見てくるので
そろそろ助けて
あげようかと考えると――

案外大胆
なんだなぁ
……だが

スリ…

カタ…

こんな
張形よりも――

ヌッ

『本物』の方が
断然良いぞ？

藍様に
言いくるめられ
二人で路地裏へと
連れて行かれる

妖夢の方はというと
既に恥ずかしさと
期待を膨らませた面持ちで
完全にスイッチを
入れられているようだ

ならばと壁に手をつかせ
可愛らしい尻を
露わにさせる

PM 15:26

華奢な腰を乱暴に掴み
妖夢の幼さが残る膣内へ
愚息をあてがい挿入する

先程のやり取りで
幾分か興奮していたのか
ほどよく濡れた膣肉は
異物の侵入を
しっかりと歓迎してくれた

ぷぁ…♡

野外での行為に
大きな声を出すまいと
必死に抵抗する姿は
とても健気で

嗜虐心に火が付き
ついつい汚したくなり
腰を打ち付ける力が増す

服を肌蹴させ
外気で敏感になっている
乳首を吸い上げると

可愛らしい嬌声が
我慢の隙間から漏れ
耳を楽しませてくれる

両足を抱え込み
浮いた身体を
壁に押し付けながら
妖夢の膣内へ
好き放題欲望を吐き出す

身体は
快楽を否定するよう
びくびくと震わせるが

それに反して膣内は
白い汚れを全て受け入れようと
きつく締め上げ
降りてきた子宮口が
逃すまいと吸いついてくる

膣内の胎動に身を焦がされ
身体を預けるように
力なくしがみつく妖夢を
包み込むように支えてやる

行為の余韻を
楽しんでいる最中

不意に
抱きつく力が
強くなったと思うと

ぎゅ…

藍様には
聞こえないよう
耳元で囁かれる

幽々子様も
寂しがられて
おられます

どうかまた
お屋敷の方にも…

予定にはない
突然の逢瀬では
あったが

チュッ…

自分だけ
寵愛を受けるのは
不義理だと
思っているのだろうか

そんな
生真面目すぎる顔に
口づけを最後に一つ
落としてやった

PM 16:12

身だしなみを整え
妖夢と別れる

ペコ

行為を最後まで
見届けていた藍様は
実に満足そうな顔を
浮かべていた

ニヤ

ニヤ

PM 17:08

帰路の途中
『今度白玉楼に預けて』や
『６Ｐも乙な物か』とか

不穏極まりない
単語が交じる
独り言を呟いていたのが
非常に気になるが

帰り道は
特に何事もなく
帰宅することができた

藍様はそのまま
夕餉の準備へと
向かってしまったので

夕餉まで
時間を潰そうと
自分の部屋へ戻ると

ガタッ

ガタッ

愛しい先客が
帰りを出迎えるように
部屋の中から
飛びついてきた

部屋の中で
何をしていたのかなど
聞きたいことは
一杯あるのだが

くるりーん。

有無を言わさず
そのままくるんと
半回転

ドサッ

あっという間に
予め敷いていた布団に
押し倒され
紫に伸し掛かられる

その顔は明らかに
劣情を灯しており
一刻も早くの
愛し合いを求めて居た

ね……？
いいでしょう…？

もう夜まで
待ちきれないの……

PM 17:17

そのままごろんと
身体を密着させ
お互い布団に横たわる

自ど見押し
然と唇が重なる
どちらからとも言わず
しばらく豊満な身体を
押し付けられながら
見つめ合い

服の上から
愚息を愛撫され
『今は私から、ね』と
声を我慢するよう命じられる

触れる肌から伝わる
体温を味わいつつ
紫の献身的な奉仕を
堪能する

何度も
快楽から漏れる
情けない声を
咎められつつも

紫の口内や
顔、身体に欲望をぶちまけ
夕餉前の
小さな戯れを楽しむ

あ…あのー……紫様……

ドキ♥

ドキ♥

PM 18:09

あら……そろそろお夕飯かしら?

そんな中授乳プレイの現場を橙に目撃されてしまう

は…はいもうすぐだと…

妖怪だから実年齢は彼女の方が上だとかそもそも何十回も身体を重ねているとかそういうのは色々あるが

兎にも角にも幼い外見を持つ橙に赤子のように乳を吸いながら手で抜いてもらっている成人男性の光景を見られるのは男の自尊心的に恥ずかしい

あの……
お邪魔でしたか…？

そんなこと
ないわよ

それよりほら
彼が咥えて
ほしいって

えっ…
いやあの…

言ってません

ドキッ♡

そ…それでは
失礼します……

ドキ♡

ズッ…♡

口を
塞がれてるので
抗議は届かず

ドキ♡

チュッ…♡

ビクン♡

おずおずと
橙の口が
愚息に触れた瞬間
快楽の刺激が限界を迎え

紫の慈愛に満ちた
授乳を受けながら
橙の小さな口に
欲望が勢い良く
吐き出された

ビュルル♡

橙は最後までしっかりと
欲望を受け止め
日頃の調教からか
付着した残りの白濁液を
丁寧に舐めとり始める

ふふ
おっぱい吸いながら
小さな子に
お口でして貰うなんて

御飯前だって
言うのに
ひどい人だこと

PM 20:14

夕餉や入浴を終え
就寝と毎夜の営み目的で
紫様の部屋へと足を運ぶ

もはや
習慣と言える頻度で
行われている事だが
この時ばかりは
いつも身体は緊張する

ジュキ…

ジュキ…

部屋の中では
気持ちを
高揚させるような
仄かな香の香りが漂い

寝間着に着替えた
三人が布団の上で
こちらに笑みと
期待の眼差しを
向けてくる

紫と藍にしなだれかかれ
布団へと押し倒されると
四つの柔らかさが
愚息を襲う

たぷ

たぷん

ニュチュ

ズチュ

じゅ

頭の中が
快楽の二文字で埋められ
理性を飛ばし二人の胸だけを
気が済むまで揉みしだき
犯したくなるがぐっと堪える

二人の前戯は
ねっとりと続き

チュッ

チュッ

チュ・パ

胸や顔を
互いの唾液や先走り汁で
汚しつつも一心に
楽しんでいるようだった

ズプ…

我慢の限界を迎えそうなのを見計らい対面で紫を抱えながら挿入する

キュンッ

熱く濡れた膣内が逃すまいと締め付け歓迎してくれる

ズプ…

前戯で思う存分焦らされていたので射精にそう時間はかからなかった

ハッ

あんっ

あったかい…

ハッ

ビュッ

吐き出された欲望が紫の身体の一番奥まで汚していく

キュンッ

キュンッ

ゴポ…

たっぷりと
心地よい絶頂を
迎えた後

欲望で埋め尽くされ
溢れかえる紫の秘所から
愚息を抜くと

さ……
もっと
足開いて……

ほら……
もう待ちきれなくて
こんなに
なってるぞ…？

ドキン

プシッ

ドキン

ドキン

橙の幼いワレメは
一目見ただけで
愛しい人のモノを
いつでも受け入れられるよう
準備が整っており

加担したであろう藍が
唾液で光る橋を作りながら
その成果を見せつけるように
ワレメを指で開帳させている

情熱的に誘ってくる
二人に覆いかぶさり
遠慮なく
まとめて肉欲を満たす

橙の精一杯
受け入れようとする
小さい膣内を
無理矢理気味に犯し

藍の
包み込んでくれるような
とろとろした
膣内を存分に堪能し

交互に腰を打ち付けながら
遠慮なしに二人の
膣内の感触の違いを
楽しんでいく

心の底から
気持ちよくなってほしいと
献身的に奉仕してくれる
健気な橙を愛でつつ

お兄さんっ♥

お兄さんっ♥

日中と立場が変わり
犯されたがる藍を
後ろから
激しく突き上げて

最後に三人を並ばせ
全てを
屈服させるかの如く

彼女らの最奥へと
存分に
欲望を注ぎ込む

互いに満足し事を終え
軽く睦言を
交わしていると

紫に
顔の近くで
艶やかに囁かれる

PM 23:59

ボッ…。

黙って
私たち以外の娘に
手を出すのは
あまり好きじゃないの……

今度から
幽々子達の所には……
みんな一緒に
行きましょう？

どうやら今日以上に
愛し合う日が
ありそうで

スケジュールは随時
変更を検討しなければ
ならないかもしれない

AM 0:00

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
ハクタクヨル
AM

チュン…

おはよう

チュンチュン…

AM？？？？

……昨夜は
激しかったけど

よく
眠れたかしら？

引き寄せられるように
はだけた寝衣から
こぼれ落ちる
豊かな胸へと手を伸ばす

あん♡

むにゅ♡

柔らかさを愛でると
この綺麗な肌と
激しく身体を重ねた
昨晩の記憶が
鮮明に呼び戻される

…触るだけで
いいのかしら？

殿方の朝は
痛いほど
辛いのでしょう？

好きに使って
構わないわよ…？

『愛人』のお誘いを無碍にはせず
彼女に伸し掛かり愚息を擦り付けるよう柔らかい胸を蹂躙し
彼女は淡い笑みを浮かべながら無粋に飛び散る欲望を受け止めてくれた

寝起きに
亡霊の姫を汚す
背徳感を味わいながら

また
いつも通りの
一日が始まる――

AM 08:11

では妖夢殿
今日も
よろしく頼む

はい
お気をつけて

この度は
冥界周りの
結界調査とのことで

八雲一家一同
紫様のご友人である
西行寺幽々子殿の元にて
お世話になっている

――っと
その前に……

ちゅー
ギュー
大規模で長期に亘る遠征作業のため
紫様のお屋敷に人間一人だけを残す状況を不安視され
ちゅう…
サワ…
ふにゅ
したくなったらいつでもお願いするんだぞ…？
私自身も白玉楼にしばらく身を預ける運びとなった

クイッ
あの……
藍様達を見送ると妖夢に小さく袖を引かれる
何か御用はありませんか…？
私にできることなら何でもお申し付けください
庭師の仕事はいいのかと聞くと
御客人にご満足して頂くのも……
私のお仕事ですので……
と、頬を赤らめ期待と不安の眼差しを向けて来る
もう何度目かになる誤魔化しのやり取りを今日も交わしながら
ビクッ
さわっ…
小振りながらも形の良い尻を撫で回し自室へと連れて行く
なで
なで

ちゅぱ…

AM 09:02

ちゅぷ

畳の上に寝転がり
愚息を露出させると
妖夢はおずおずと
口でご奉仕を始める

チュッ

チュッ

まるで割れ物でも
扱うかのように添えられた
震える両手が
健気で可愛らしい

その事を
指摘してやると
嬉しそうな表情になり

ハッ

くちゅ

くちゅ

フッ

舌の動きが
愚息を
味わうかのような
丁寧なものになる

ドビュ
ツプ…
容赦なく口内へと吐き出された欲望も少し苦しそうではあるが
何も言わず飲み込んで肉体を構成する要素の一部と化していく事に戸惑いは無いようだ
で、では……
ぴくッ
ぴくッ
失礼します……

そのまま妖夢に
騎乗位でご奉仕を要求し
無手のまま快楽を堪能する

まだ成熟しきっているとは
言えない妖夢の膣内は
ビクビクと痙攣しながら
愚息を迎え入れる

ズプッ♥

ズプッ♥

にゅこ♥

ぬぷっ…♥

ガク

ガク

気持ちよくなってもらおうと懸命に腰を動かす妖夢へお返しに

ドン

乱暴に腰を突き上げ降りてきた子宮を押し返すように膣内へ欲望を叩きつける

ビクッ

ヒクッ

ゴッ

サワ…
ビクッ
悦びの強襲で妖夢が動けないのをいい事に
彼女の女性として丸みを帯び始めてきた柔らかい部分を撫で回し堪能することにした
チュッ
ムニュ
AM 10:04
妖夢に部屋の後始末を任せ
程よく日が差す蒼昊の空の元
ちゅうう

朝の陽気の残滓を感じながら

縁側にて幽々子の授乳を受けていた

ちゅぱ

ちゅぱ

『毎日定期的におっぱいあげてねー
じゃないとあの人死んじゃうから』
と紫様から言われたのこと

一体私はなんだと思われているのか

おっぱいの時間ですよー♡

えっ

ポルン

ただ青空の下
日も高いうちから
人目を気にせず

ちゅぱ♡

好き放題に
巨乳を味わえるのは
とても――

ズッ…

ふにゃ

あらあら

ココも随分
立派にしちゃって

そんなに
幽々子のおっぱい
気に入っちゃった？

ポワ～ン♡

あら紫
おかえりなさい

ただいま

といっても
また戻らなきゃ
だけど……

……そう
じゃあ外したほうが
いいかしら？

……大丈夫よ

三人で
楽しみましょう？

3Pよ♡♡

AM 10:59

ピクッ
ビュクーッ
ビクッ
ビュルッ
ビュルルルッ
ひくッ
ひくッ

ガチッ…
ぐちゅ♥
あっ♥
んあっ♥
クチュッ♥
ダチュ♥
ぐちゅ♥
ちゅぷ…♥
♥♥

ツプ…
ぐぷぷ…♥
ビクッ
ビクッ
カタ…
カタ…
キュッ…
――彼女の生い立ちは紫から聞いていた

死を誘う少女は
誰に好かれることもなく
誰にも愛されることもなく

ただ一人
悲しみに包まれ
その生を終えたという

望まぬ因果に巻き込まれ
数多の魂を冥府に堕とし
自らの存在を嘆き疎んじ

賤陋な悪意に晒され
失意に当てられ自命を絶ち
人の輪廻からも外されて

そんな愛を知らぬ
乙女を見かねた
たった一人の友人が

救いの手を
差し伸べる——

そんな美談にも
なったのかもしれない

その友人が
愛に狂っていなければ

八雲紫は恋人への
奉仕の品として

千年来の友人を、
その従者を、
私に捧げたのだ

幽々子はそれでも
知己の提案を受け入れ

私の愛人となることを、
自ら寵愛の道具として
使用されることを決めた

傍から見れば

八雲紫は恋人の為に

身内を売り飛ばした

外道と映るだろう

如何にも其の通り

彼女は私の心を
自らの手元へと
繋ぎ止める為だけに

肉欲の鎖を躊躇なく
強固なものへと
変えていく

無論
今更外の世界に帰る
などとは
言わないのだが

彼女にとって
その事だけは
永遠に消えること無い
不安の楔なのだろう

ムギュ
ヌップ
ヌップ
……ただただ快楽を享受するだけの畜生に
びくッ
ビュルルッ
ビュルルルッ
ドク
堕ちきれなかった私はせめてお互い幸福になるよう尽力はしている

ちゅっ…♥

チュパッ♥

チュプッ♥

PM 00:00

行為を終え——
美人二人に
先程までの後処理を
好き放題に任せる

ちゅぷ♥

ちゅぷ♥

ちゅぷ♥

まだ興奮
冷めきらぬようで
胸や口を使い
愚息を取り合う光景は
男冥利に尽きる壮観であった

征服欲と疲労で
ぼんやりとした
頭の中に

昼の刻を告げる
微かな鐘の音が
淫猥な水音と共に
耳に届く

続

ハクマスケジュール

PM

静かで厳かな
冥界のお屋敷の
一室で

あんっ♥

いささか雰囲気に
似つかわしくない
女性の嬌声が響き渡る

やんっ♥

PM 12:54

日はまだ
昇りきったばかり
だというのに

あんっ♥

あっ♥

着物も乱れ
あられもない姿の
亡霊の姫君と
獣のようにまぐわっていた

いつもは
掴みどころが無く
ふわふわとしているが

姫という言葉に恥じない
しっかりとした
淑やかさや上品さを併せ持つ
彼女からは
考えられない激しさだった

ビクッ

ちゅ

唐突な
彼女の変わりようは
遡る事
小一時間ほど前

ちゅぱ ちゅぱ ちゅぱ

紫も一緒に
三人で
戯れていた時

ちゅっ…♥

ちゅぷ♥

ちゅぷ…♥

そうそう……

そろそろお仕事も
終わるから……

ちゅぱ…♥

今夜辺り
そろそろお屋敷の方に
戻りましょうか

しゃ…♥

それを
聞いてからと
言うものの

まるで
離れたくないと
言わんばかりに
彼女はより一層
私を求めるようになった

紫様が仕事に戻った今でも
こうして二人で
情欲に乱れているのである

流石に
お互い疲弊してくると
我に返ったようで
ハッ
ご、ごめんなさい
私ったら……
いえいえ
幽々子様も
あんなかわいい顔
なさるんですね
ガア…
先ほどの
自分の嬌態を思い出し
赤面する幽々子を
後ろから抱きとめる
すると
大きな腹の虫
グゥ…
そういえば
お昼も
まだでした
そうね……
それじゃあ
一緒に……

……すみません

私の食事は
藍様が用意して
くれているので……

そう……
だったわね……

……ごめんなさい

遅い

返す言葉も
ございません

藍様との
お昼ご飯の約束に
〆て一時間十八分の
大遅刻である

遅れるだけなら
いざ知らず

他の女との
情事の匂いを隠さず
『遅れてきました』は
いささか
失礼すぎやしないか？

ゴゴゴ

PM 13:48

↑待ちくたびれて寝てる橙

まったくと
呆れられながら
お仕置きのキスをされた

ちなみに
間に合った場合は
ご褒美のキスが貰える

モク
モク
藍様が作ってくれた
お弁当に
舌鼓をうっていると
しつこい
ようだが……
ズイッ…
『何も食べて』
いないだろうな？
藍様の
真っ直ぐな瞳が
こちらの瞳の奥底を
覗いてくる
……ええ
『何も食べて』
いませんよ
……そうか
なら
いいんだが
まぁ私の料理は
冥界の物ではないし
安心して
食べるといい
愛情
たっぷりだからな

なるほど

ところで
食べ始めてから
身体が不自然なほど
元気になってる
気がするんですが

これも
愛情ですか

安心してくれ

きちんと愛を込めて
調合してるから
副作用の心配もないぞ

えー

PM 14:11

薬の効果が
出てきたのか
だんだんと
我慢が効かなくなり

食べきった時には
藍に後ろから
覆いかぶさっていた

お仕事が
あるんだけどなぁ

ぷにゅ♡

やや力任せに
たわわな双房を
好き放題揉みしだき
柔らかい身体を堪能する

そのまま近くの木に
手をつかせ
張り詰めていた愚息を
お構いなしに挿入する

ビクッ

ビクッ

少し吃驚が混じった
嬌声とは裏腹に

私の形を完全に覚えた
藍の膣内は
柔らかく包み込んでくれた

そのまま
何度も何度も
腰を打ち付け

パンッ

パンッ

喜んで
歓迎してくれる
彼女の身体を
存分に味わう

藍の身体を
押し潰すように
膣内の最奥まで侵入し

容赦なく欲望を
吐き出していく

絶頂に合わせ
藍の膣内が小さく痙攣し
下半身がまるで
吸い込まれるような
気持ち良さが駆け巡る

ふふ……
満足したか…？

午後も良い子で
待ってるんだぞ…？

宛行われた部屋の
片付けや帰り支度を
していると

カラ
カラ
カラ

し……
失礼します……

妖夢と幽々子が
部屋にやってきて
開口一番

PM 15:39

その……

「おっぱいの時間」
ですので……
ご奉仕に参りました……

なんて？

そのっ　定期的に
おっぱい吸わないと
全身から血を吹き出して
死ぬって本当ですかっ

でしたらもっと早く
言ってくだされば
私もご協力をっ

みょーん

性癖のこじらせ方が
預かり知らぬ所で
どんどん凄い物に
なっていく

とりあえず
慌てる妖夢の
誤解を解いた後

せっかくなので
そのままおっぱいを
頂くことにする

服を肌蹴させ
胸を露わにさせると
妖夢の身体が
小さく震え始める

いい感じに
嗜虐心が刺激されたので
そのお礼として
妖夢の清純な身体を
舌で丹念に汚していく

少々小振りだが
外見相応に育った
膨らみを
優しく撫で回し

先端の果実に
思う存分吸い付きながら
舌でねぶり回していく

すりすり
あなたのおっぱいで
こんなに
興奮してくれてる
みたいよ？
うふふ
妖夢？
ぎゅっ

え……
あ……
ほら　ちゃんと
言わないと
ダメじゃない
……

PM 16:11

どうか…
帰る前に……
キュッ
もう一度だけ
寵愛を……
頂けませんか…？

……ふしだらな女で
申し訳ありません

仰向けにした妖夢の股を
ぐいと開かせ
愚息を最奥まで挿入する

恥辱的な体勢を
無理矢理取らされ
恥じる妖夢の反応が
ますます興奮する

そのまま
自分本位の勢いで
一方的に
腰を叩きつけるが

妖夢の四肢は
さらに快楽を
受け止めようと
身体に巻き付いてくる

こちらも
妖夢の腰を浮かせながら
脚をがっしりと固め

女としての快楽を
体内の五臓六腑
全てに刻み込み

孕ませんとばかりに
最奥を押し潰しながら
子宮に大量の欲望を
流しこむ

そのまま
期待の目で傍観していた
幽々子を抱き寄せる
ギュッ
少し強張ったが
キスを落としてやると
すぐにとろけた顔になり
んっ…
ちゅっ
こちらの首に
手を回し
ちゅぱっ
ぷぁ…
より深く
繋がる事を
所望される
ちゅぱっ
PM 16:59
びくんっ
びくんっ
ずぷっ
ぱんっ
ぱんっ
ちゅぷっ
きゅん
きゅんっ

PM 18:02
……それでは
お世話になりました
ええ
またいらしてね

あと……
最後にコレを……

まるで隠すかのように
幽々子様からこっそりと
何かを手渡される

スッ

……お家に
帰ってから
一人で開けてね

ニコ…

添えられた手は
少し震えながらも

静かな力強さを
確かに感じた気がした

マヨヒガに戻り
自室にて

しゅる…

渡されたものを
確認すると

それは
一つのお菓子だった

おそらく
幽々子お手製の
ものであろう

冥界での食事は
藍様が用意してくれたものしか
口にしていなかった

人間が下手に
黄泉のものを食べると
そこから帰って
来れなくなってしまうからだ

確か
黄泉竈食ひ(よもつへぐい)と
言ったか

口には出さぬとも
その事は
皆が理解していた

それこそ
お世話になる日から
全員で細心の注意を
払うほどに

だから……
これを渡すと
いうことは

幽々子は
現状からの
脱却を望んでいるのか

あるいは……

彼女も……
私のことを……

ダン

ともあれ
理由の如何に問わず

これは
愛を知らなかった
彼女が示す

精一杯の
『覚悟』である

この
黄泉竜食ひを
紫に見つかろう
物ならば

如何に彼女たちが
古くからの
友人同士と言えども

おおよそ
日を覆いたくなる
光景になるのは
容易く想像できる

それでも彼女は
『覚悟』を示した

だが……

それがこの
手渡された
黄泉竜食ひ

私には
受け入れることは
できないのだ

愛を知らない少女が
絞り出した
決死の『覚悟』

私には

その覚悟を
踏み躙る事しか

……？

橙…？

いつから……

幽々子様の思いも、覚悟も、何もかも。

何も気づかぬまま……

貰ったお菓子を『偶然』にもいたずら妖怪に見つかり食べられてしまった

それで、おしまい

お兄さんは
誰の思いも
踏み躙ることもなく

誰も
傷つけてさえ
いません

ただ、気づかないうちに
全部終わった
だけなんですから

それで、
おしまいなんです

さ　行きましょう

今夜も
紫様と藍様が
お待ちですよ♪

AM　00:00

彼女たちは

畜生に落ちることすら許さない。

終

それからのおはなし。

やがて夜の帳は下り
日と日の境界上で

まるで一日の
疲れを癒すがの如く

ちゅぅ♥

ちゅぅ…♥

四つの豊かな果実で
赤子を慈しむかのような
寵愛を受けさせて貰っていた

ムギュッ♥

ムギュッ♥

ちゅうぅぅ♥

ちゅぽ…♥

びくんッ♥

びくんッ♥

温かく柔らかい谷間に
すっぽりと
愚息が包み込まれる

むぎゅ♥

二人の豊満な胸の中で
情けない声を上げながら
まるで漏らすような
心地よい絶頂を迎えてしまうが

ビュルッ♥

ビュルッ♥

二人は全てを
受け入れてくれるような表情で
射精が終わるまで
こちらを見守っていてくれた

ギュ

ぺろ…♡
射精が終わると
傍らで見守っていた橙が
お呼ばれし
愚息の掃除を命じられる
ドキッ♡
おずおずと強張りながら
掃除を開始するが、
何度も経験させた事もあってか
丁寧に精液が舐め取られていく
どきどき♡
ちゅっ…♡
ビクッ♡

ちゅぱ

ちゅぱ

知らず識らずの内
三人が自分の愚息に群がり
舌を這わせる光景に
変わっていた

頭を抑え込み三人の口に
愚息を無理矢理押し付け
ご奉仕を強要させると
征服欲が満たされ非常に興奮する

ちゅぱ

ちゅう…

ちゅぱ

ちゅぱ

キュ～ん♥
キュ～ん♥
ツプ…♥
やがてどちらからともなく
直接の繋がりを求め合う
びくんっ♥
パンッ♥
ビクッ♥
パンッ♥
快楽に震える
恋人たちが愛おしくて
こちらの欲望も
ついエスカレートしていく
ズプッ♥
ズチュッ♥

それでも
全てを受け止めてくれる
彼女たちを心から愛しながら

最後は獣のように
激しくお互いを求めあった。

やがて
日光の刺激に日を覚ますと
同じく起床した彼女と目が合う。

きっと、これからもずっと。

発行・制作

碧猫（みどりねこ）

midori0014@gmail.com

みどり

http://www.pixiv.net/member.php?id=76139

印刷

栄光印刷

謝辞

ZUN（上海アリス幻樂団）

みどりねこ
碧猫